千恵子の生き方

田宮虎彦

読者へお願い

「読後の感想」を、左記あてに、お送りいただけましたら、ありがたく存じます。

なお御職業、年齢などもお書きそえいただけましたら幸いに存じます。

東京都文京区音羽町三
光文社出版局
神吉晴夫

小説　千恵子の生き方

昭和29年12月5日　初版発行
昭和30年2月10日　9版発行

¥100

著者　田宮虎彦
発行者　神吉晴夫
印刷者　山元正宜
東京都文京区柳町26・三晃印刷

発行所　東京都文京区音羽町3　株式会社　光文社
振替東京115347

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします　〔美行製本〕

小説

千恵子の生き方

田宮虎彦著

目次

まごころ……五
波子の幸福……三三
藤の花……六八
千恵子の生き方……九三
須磨の月……一一七
裸女の像……一三七
色は匂えど……一七一
あとがき……一九九

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

まごころ

園子には、そのころ、ひそかに思いをよせていた青年があった。だが、その自分の思いが――恋だとは園子はおそろしくて思えなかった。いや、事実は恋にちがいなかったのに、しいて恋ではないと自分にいいきかせていたのだった。

園子は自分が醜いことを知っていた。それも、女とはいえないほどの醜さであると、園子自身も思っていたのであったから、そんな自分が、人から愛されるなどとは、とうてい考えられないことであったのだ。

園子が自分の醜さをはっきり思いさとったのは、十四の歳の梅雨のころであった。こんなことがあった。

園子の父親の龍作は、A市ではただひとつの総合病院である井波病院で事務主任をつとめていた。院長の井波健吉と親戚つづきで、小さいながら別棟になった住居を病院の片隅にあたえられ

ていたが、園子は幼いころからよく一人でその住居から病舎をぬけて、龍作のつめている病院の事務室にはいっていった。龍作の机は病院の本館と病舎のあいだの内庭にむかった窓ぎわにあった。病院の中は、どこも刺すようなクレゾオルの匂いが冷たくよどんでいたが、ただ龍作の机からみえる内庭だけは、三色すみれや、紫陽花や、カンナ、コスモス……といったさまざまな草花が、寒い冬の二、三ヵ月をのぞいた春、夏、秋とりどりに美しく明かるく咲きそろっていた。

園子がひとりで事務室にはいっていったのは、窓ぎわの龍作の机のそばから、その内庭の美しい花壇をあかず見てすごすためであった。園子は草花が好きであった。いつか園子が事務室に出かけて行くことは、ほとんど日課のようになっていたが、園子が女学校にはいった年の、じめじめと梅雨がふりつづきはじめたある夕方、勤務の時間もすぎて人かげもない事務室の父の机のかげから、いつものように内庭の花壇をみつめていると、ふと、うしろで、

「鬼瓦はん、また花みてはる――」

とささやくようにいう声がきこえた。

ちょうど、花壇をとりまいて紫陽花の花が咲いているころで、淡いみずいろに咲きそろったその花をみつめていた園子は、それが自分のこととは、さすがに思えなかった。だが、なんとなく気にかかって、ふっとふりかえってみると、池谷という看護婦と、益田という雑役婦とが、じっと園子をみつめていた。狼狽するようにすぐ園子から目をそむけたが、その目差は石のように冷

たかった。園子は、その二人の目差をみたとき、さっきのささやきが自分のことであったのをとっさにさとった。自分の醜さがはっきり心にきざみつけられると、園子は言葉を忘れたように人と口をきかなくなった。人からかわいがられないことが、自分でも当然と思ったからであった。

園子が慕わしく思っていた青年は、海老名修一郎といった。やはり井波病院の院長の親戚つづきで、東京のK医科大学の学生であった。修一郎は毎年夏の休暇には、井波病院に実習に来ていたが、それは修一郎ばかりではなく、院長や院長夫人の親戚で医科の大学にかよっている青年たちが、毎年四、五人は井波病院で夏の休暇をすごすのであった。そうした青年たちは白い診察衣をきて院長の回診についてまわったり、顕微鏡をのぞきこんだりしていた。

園子は看護婦の陰口をきいたときから、めったに病院の中へはいって行くこともなくなっていたが、それでも修一郎のそんな姿をみかけたことがある。長身できりっとひきしまった面差の青年であった。しかし、園子が修一郎に思いをよせるようになったのは、そのときではなかった。

井波病院のあるA市は、中国山脈の中にとじこめられたような山国の町であった。A市から私鉄の小さな汽車に二時間ばかりゆられると、瀬戸内海ぞいのHというさびしい漁村に出る。入江が深くいりこんで、小波ひとつないしずかな美しい海べがつづいているのだが、そこに井波病院の別荘があった。夏休みの実習などといってA市にやってきた青年たちは、実習をそこそこにす

ますと、その別荘で残りの休暇をおくるのが例年の慣わしだった。

Hには、園子も、毎夏一度は出かけていった。A市の駅前通りで園子の叔父が歯科医師をしていて、そこに雅枝という同いどしの従妹がいたが、その雅枝に園子は誘いだされるのだった。だが、Hに出かけていっても、園子は、雅枝といっしょになって遊ぶわけでもない。雅枝が青年たちにさそわれて海べで遊びたわむれたり、麻雀をしたりしているときでも、園子は、こっそり漁師たちの地曳きをみてすごしたり、ひとり部屋に残って小説をよんだりしていた。

その年も、やはり雅枝にむりにひきずり出されるように園子はHに出かけていったが、あいかわらず一人だけぽつんとはなれて、日をすごしていた。雅枝が青年たちといっしょに海べに出てしまったあとは、園子は、本にもあきると、井戸端におりていって、こぼれるように咲いている鳳仙花や女郎花に如露で水をやるのだった。

園子がHについて三、四日たった日のことだったが、その日もいつものように園子ひとり別荘にのこって、鳳仙花に水をやっていたとき、ふいに、園子は、

「これから、沖釣りに行くんだよ、行かない？」

とよびかける声を聞いた。

あまりふいだったので、園子は思わず、はっとしてふりかえった。つばの広い夏帽子をかぶった修一郎が、園子の前に立っていた。

「みんなもう舟にのっているよ。早く。」

修一郎はそう言いすてると、もう足ばやに海べの方へ去っていった。

園子は自分がさそわれたことが意外で、ぼんやり立ちすくんだまま返事をかえすことも忘れていた。自分にいいかけられたのだろうか、と思いかえしてみたが、井戸端には自分ひとりしかいないのだった。やはり自分にいわれたのだ――園子は、そう気づくと、急に、わなないくような心の慄えを感じた。それから、ポオウッと頬があつくなった。とっさにかけだして、修一郎のあとを追いかけようと思ったが、反対に園子はそのまましゃがみこんだ。そして、鳳仙花のほろほろこぼれる赤い花びらを、無意味にむしっていた。

暗くなって修一郎たちは沖から帰ってきた。三、四寸の鯛や、鱚が魚籠の中でぴちぴちはねていた。

従妹の雅枝は、園子とちがって、あどけなく美しかった。園子は修一郎たちといっしょに帰ってきた雅枝の赤く陽にやけた顔をみたとき、修一郎が井戸端で自分を呼んだのは、もしかしたら、自分を雅枝とまちがえたのではなかったかと思った。だが、そんな疑いも園子の思いすごしであった。園子が別荘番の夫婦に手つだって、修一郎たちの釣ってきた魚を井戸端で焼いていると、修一郎が、

「さっきは、どうして来なかったの。」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

と声をかけた。園子は沖釣りにさそわれたときよりもさらにうろたえて、やっと、

「あまり突然だったものですから。」

と答えかえしたが、自分の答えた言葉が、自分の耳にもはっきり聞えなかったほど声がかすれてみだれた。

その後、園子がA市に帰るまで、修一郎はときどき園子に話しかけるようになった。べつにこれといった意味あいもない朝夕の挨拶の言葉ぐらいだったが、園子には、自分に言葉をかけてくれる修一郎が、急に身近いものに思われてきた。修一郎は、話しかけるとき、ちょっと目をみはるようにして、半分わらいかけるようにする。そんな修一郎の面差(おもざし)が園子の心にきざみこまれるように印象づけられた。

A市に帰ってきてから、園子は幾年かぶりに病院の事務室へいった。花壇(かだん)には赤いダリヤやバラが咲きにおっていた。それをみつめるふうをしながら、園子は、じつは、もしかしたら、そこで修一郎にあえるかもしれぬと思っていたのだった。

園子の住居は同じ病院の中にあるといっても、修一郎たちの泊っている院長の邸が病院の本館にならんで、A市の表通りに面しているのに、園子の住居は病舎の奥にあった。それで、修一郎にあうためには、病舎をぬけて病院の本館へ出るか、それともいったん裏通りへ出て、大きく病院のそとをまわってゆかねばならなかったのだ。

園子は、そんなにまでして修一郎にあいたいと思っている自分が、おかしいようでもあった。こっそり修一郎の姿をみるために、幾年もこなかった病院の事務室に来ている自分の心の底が、事務室を出たり入ったりする人たちに、もうすっかり見すかされてしまっているように思えて、園子ははずかしくなって住居の方へ帰ってきた。

二、三日して、園子は、A市の駅前通りの雅枝の家をたずねた帰り、修一郎にあった。すれちがうとき、修一郎はHの別荘で顔をあわせたときのように、半ば笑いかけるように、

「ヤア。」

と声をかけて遠ざかっていった。

園子は自分が修一郎によせている気持を、あるいは恋というのではないかと思った。そうかもしれぬという気持と、そうではないという気持とが園子の心の中で渦巻（うずまき）をかきたてた。胸がしめつけられるようであったが、園子は、恋ではないのだ――としずかに自分にいいきかせようとして目をつぶった。園子には、修一郎のやさしさが身にしみて感じられてはいたが、それ以上の気持が修一郎にあるとは思われなかったのだ。そして、片思いという言葉を思い出して、もし、自分の思いがそれであるなら、悲しいな、とさびしく思った。

それからあと、園子は、ときどき、修一郎のことを思い出した。恋――ではないと自分にいいきかせながらも、Hで自分に声をかけてくれた修一郎を、親身の兄のように思いしたう気持はい

よいよつのっていった。兄ならば、自分がいくら醜くても、その思慕が悲しさをさそわないようにも思えた。

それ以後、園子は、東京の大学に帰っていった修一郎のことを思いおこすたびに、ものがなしいような、たのしいような思いを心にいだきつづけた。園子は自分の醜いことを知ってはいたけれども、自分の胸の小さな乳首が色づき固くしこって、やがてそれが盃を伏せたようにふっくらもりあがって来た三、四年まえから、自分がいくら醜くても、やはり女であることを意識はしていたのだが、自分が女である喜びを感じたことはそれまで一度もなかった。だが、今は、自分がなんとなく、うかれているような気持がしていた。いうまでもなく、修一郎から、自分が一人の女として（というよりは人としてであったろうが）言葉をかけられたという思いが、その喜びを園子の胸にわきたたせていたのである。

一年すぎた。夏が近づいてくるにつれて、園子は、また夏がきて、ふたたび修一郎と日ですごせることが待ちどおしくてならなかった。園子はその春A市の女学校を卒業して、井波病院の事務を手つだっていた。

夏のはじめ、大陸での戦争が勃発したが、やがて夏休みになると、修一郎たちは、例年のように井波病院にやってきた。そして、実習の診察衣姿を病院にみせた。修一郎は事務室に顔をみせ

たとき、そこに働いている園子に気づいて、
「おや、こんなところに？」
といった。園子は、――ええ、と答えながら、かわらない修一郎を感じて、頬をそめた。
八月も二十日すぎて、園子は病院から休暇をもらうと、すでにHに出かけていっていた修一郎たちを追ってHへ行った。今年も、やはり従妹の雅枝といっしょであったが、園子の方からHへ行こうとさそわれて、雅枝はちょっとびっくりした顔をした。
絵のように美しいHの村の姿は、去年と少しもかわらない。ただ、漁師たちの家々に日の丸の旗がたつ日があった。それは、大陸の戦争に兵士を送りだす日であった。だが、その日の丸の旗のほかは、Hは去年のままののどかな漁村であった。地曳網をひく漁師たちのかけ声が、あいかわらずものうく単調にきこえていた。
園子は病院から四日しか休暇がもらえなかった。園子はもっと長くHにいたかった。去年までは、さして魅力を感じたわけでなかったHなのに、今年は、たった四日しかそこにいることのできないことが園子は悲しかった。といって、今年の園子も、青年たちの遊びに加わるわけではなく、雅枝が明かるい水着を波間にうかべているときも、去年のように本をよんだり、草花に水をやったりした。そして、また気がむくと森かげから桔梗の花をつんできて、そのむらさきの花を修一郎の泊っている部屋にそっとかざった。

四日はまたたくまにすぎた。明日はA市に帰らねばならない最後の日、昼の食事のすんだあとで園子が縁側に腰かけてぼんやりしていると、修一郎が井戸端へおりてきた。園子と目があうと、修一郎はくせの半分は真剣なような、半分は笑ったような面差をちらりとみせて、汗ばんだシャツを洗いはじめた。

園子はなぜか思わず立ちあがっていた。立ちあがって、どうしようというつもりもなかったのに、園子の心の中でゼンマイ仕掛がふいにかかったようなふうであった。そして、井戸端の修一郎の方へ近よっていくと、

「私が洗ってあげましょう——」

と言っていた。

「いいんだよ。」

修一郎はそうかえしたが、園子はかまわず盥の前にかがみこんで、修一郎の手からシャツをとった。そのとき、園子の手が修一郎の手にふれた。しびれるような感触がこみあげてきた。修一郎は、仕方ないような面差で、園子のそばにつっ立っていたが、やがて、

「ちっとも泳がないのに、こんなところへ来ておもしろい？」

といった。園子はきこえないふうに、だまってシャツを洗いつづけたが、しばらくそうしているうち、何か修一郎に返事がしたくなった。それで、

「私、毎日、泳いでいますわ。あなたたちがまだお起きにならないまえに、ひとりで。」
といって、修一郎をみあげた。修一郎はちょっとおどろいた顔をしてみせてから、
「それじゃ、お願いしますよ。」
といって、母屋の方へ帰っていった。
園子が修一郎のシャツを物干竿にほしていると、海水着をきた青年たちが母屋から出てきた。
修一郎は園子に気づくと、
「モーターボートにのせてあげよう、いらっしゃい。」
といった。ほかの青年たちがいたので、園子はなぜか身体がかたい貝殻にとじこめられたようで、
「乗りたくありませんわ。」
といって、修一郎をみおくった。しかし、心の中がほのぼのとあたたまるように思った。
その夜は月の美しい夜であった。雅枝は青年たちにさそわれて麻雀に加わっていたので、園子はひとり部屋にのこっていたが、青年たちの部屋から聞えてくる麻雀牌の音をきいているうち、ふっと、明日はもうここにいないのだという感傷にかられた。そして、月あかりにさそわれたように渚に出た。かすかに、小波がゆれて、汀を洗っていた。別荘のあるところから、Hの村は二、三町はなれたところにある。その家々の窓からもれる灯りが、ちょうど舞台の背景のように、またたいてみえた。自分もそんな景色の中にとけこんでゆくようで、園子は、いつか岬の方

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com